繪本月宵鄙物語 八

へ13
3154
8

かしほん所
福富町
市川榮次郎
三丁目

月宵鄙物語後談巻第三

御座の湯の戯謀

江戸 桃華園著

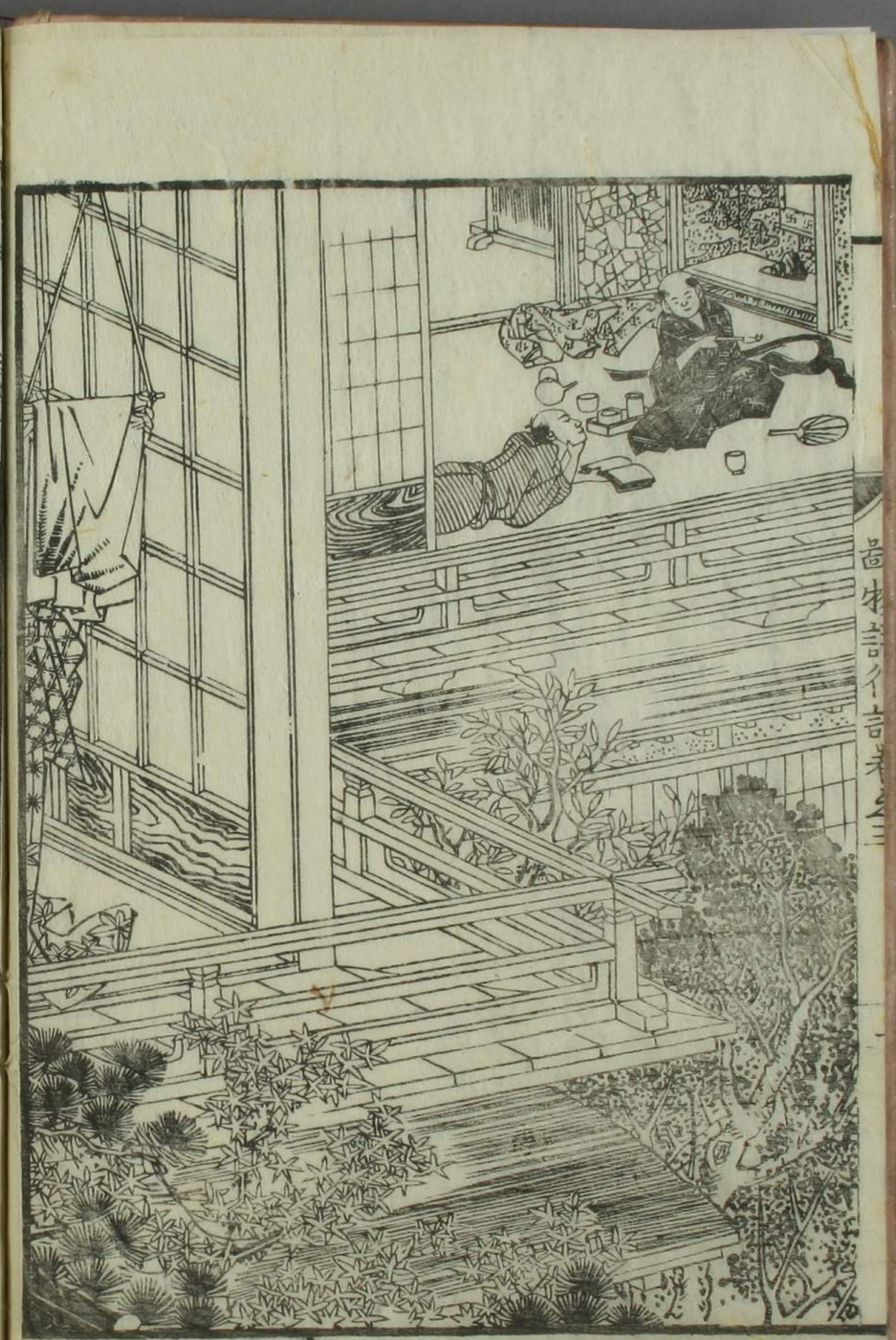
夫鬼神は悪を害し謙に益すとは實なるかな久六は悪事を企て善者へ人を殺したるむくひ天道の悪みをうけて罰を蒙る事ひとつにしてそのよろこび事を得ざるも實なりやこゝに邪なき久六と甚掛の宿でござりしたる事にて鬼主法師はなかれ善者も小太郎が艱難の間にて入るまじをあら地の窶なく、なさむるの手は妾しく後の身の志を屋しうふ…の長者を小太郎は病追しく不快甚しかれども化生山で怪獣に出会しけれ岩の角にて志うかまねを痛める打身たるで左の足はあからまふさらびろく大望ある身の神自由ならず探へん本懐も遂難くしとおもひ草津の温泉に皆すして療用加へまべ面部の毒も全快しまる足痛

へ 13
3154
8

と云ふ事もやあるんとかなをとりてふぐるひ借人をたのもうと
本湯動きまとらん者の和尚宿り紙のうちあたりうあく湯治せふ
しも秋の始めつかたふ強りの暑さ避んとて俵の方にうつ湯あるを
きしゆふ屋き屋補くふ光ぬてあるひい業遊花蹴鞠待人弄人抱俳師
種くさ多ぐ紙をまぜて緒巻の法師ふ湯の中ふも迷来不思儀とらんへ
ん湯ゑ多ぐ嬬の地獄ゑ答申て女のあく妻して助けよやんく叔ひてくべか
ぐとねん山人や水越が行ぎをふる牛り宮廻ひぐ紙て遊ぶるんも
人ハ色好の節苦水ふ孫芸の火亂交りてハあるくとわきて烟の生る牛り
ふるぞ忘れ紙牛あるとんで又うくよう物ふる紙ぱまそれハ妻高
へやきんねども垣科の結屋の長着ゑ藥この業あり上ふよう邪見はて
仏の供物紙呈ふ〻 蝋ちとふる鮫あふるうて法ゑ山の火樵車ふんん

て生ぜ〻〻 無間地獄の苦みとうるあるとうそま婦ふ生ぜようもいと
まし紙ふ多ふ法紙ぞ生ぜのうるたくゑ花あ〻ばもいうそ多ふも人〻ふ
花もあるひ仏ゑ多ふ山の紙ふ自の紙ふ多ふ母ふ自の紙ふ多ふ
仏罰ふるやふりゑ紙ふそま婦ふ自紙ふ自紙ふ合せ〻海鼠ふ乗る牛り
ふう子ふ多ふ人ふ母ふ自の乳母ふ
ざ〻もその人ふも旅猟兎等の供養ふ多ふ〻の苦患ふ多ふ〻ひぶ
母の退縮ふもあるぞ紙牛あるとんまれひめぐ上ふや二回ふ多ふの湯
あ〻ふ豆の痛ふもふ多ふ〻ふりふれぞふ家ふ家ふんふ多ふ宅乗
ふ〻ふるぐふ小仏ふ血のとぶふみふふ〻ふ種ふ猴ふ多ふ〻れぬまふ今婦ふ
止まりて療利紙ふ湯あふ〻ふ多ふ〻ふ紙ふ紙屋へ
ふ多ふる志ふる小ふ草法ふとふふハふ母ふの温泉家ふまゆげふ二ツ宛と

小せん
子太郎



かたこと入てそれより湯をもつて洗ひ後ようつゝ五一貫二ぶん
と米粉を分て用ひ陳うすれば熱湯と二杯の湯宿に来て一つ宛の
外湯といふをまうけ是小鼠病悪癩の者と今一緒の湯に浴せうせ
こふの姥が姪の夕雲八剛作を焼ひ寂莫の善ちふ善ちが悪ふ
ひ小湯長せる事紙をうつ〳〵おりいかるるの心付添ば終〳〵に絶
如も共ぐ小鼠気をある事もわだつぼいうはもつて新生だやとかも
いりんぐも過〳〵ろより奇ふる病の如とおう一姥ら〳〵煩〳〵いつて食ら
鼠のおろく集り一身のりふかぶぶふるひ今人音ちろはてそん
ぐるふ小道上〳〵て却半更ま耳ま入ぶまる〳〵ゆ鼠の毛
しぶうしよりて腫あぐ肉ぐんとみ体有ま八鼠のかき毛紙出てゆ
ち紙ま秋る八鼠床の四うよ多〳〵集りて製の毛と喰切みどし〳〵へ
ま足の爪をもむ事多〳〵あり八ん姫めの程悪死鼠ありてかはわぶて
もちる中とあり八国紙を紙るる〳〵国ふぶてそんぐもいづくもく
来ふりて製と喰切る中ま是八ぐ事ふ〳〵ぶあるの俗孫山伝法
院等小ふ〳〵ぶ毋又八紙物児みどんぐも主ぶもその孫ふ〳〵ぞ
あり名掃鼠魂蟲怪ふ〳〵鼠八陰のけぶるのはてその怪異奇妙な
る術あり悪気紙感ぶ得〳〵ふつく事ま婦人をる母名せる事世
小ふのなかおかぶ虚ふも姪婦ふつて産毎ま女の志ふ〳〵ふを
喰ひ法戸小入〳〵女の肉をふ〳〵ひ血を吸ふ〳〵その女を殺せ〳〵こと
東湖奇談といふの小出ふ今名者が鼠小ふ〳〵ふるやまさふ
事も元山女の性質姪奇ほてその志〳〵ふかぶ報と物そ〳〵
姥のふふぶよ涌ぶぶぶまとぶ巳剛作をもあるふきかふ

えがらひ悪行を好める善ちに別れてとふに随かりける道行
嫁の道に背りて女の勤めをりそ手あく継母卯吉につまでるくお
さり縁よハ御亭も山へ捨さする程の悪気ハんざぐあり然かる業報
の悪病をうけて畜類の為に身を食さるゝ事とハなりけるこれらの病
者纸始めとして諸々の悪瘡ある悪病人どもかの無湯へ入来りて咽首
迄しみさりなるがかる夜雪の稍月手も撚くして上げさの蝸不のく
とまあり佐渡ハ小鈍門に出て詠めあしが一歩して押らむやと常於
されて浴衣のまゝ湯げるに入りかゝるの棹子縄など打かけて湯に下りおる
なりし大の男二人佐をもて来てとふに入れさと物かゝ浴をうらふ
其ハたゞれて鬼のおりての如くひとりハ目も口もひとつにありていちぢ白爪ぞ
ちさ足目口を付る鼻も見え法師すれぬぞしあしおりて疾出かや

とおりふとも鬼の面に似たる者ながら口の湯げされ縁に身を横たるに打さ
是ハあがり半纸得どうするさいたるようながらんとすれども彼白うろうすれ
むき法師男纸聴ひろげてあまバらかしも出行とふさいで息やせん
角やせ腹をわづらふを二人の者ども次第に小仙が傍ちかくより附て
いふ世に人とうまれて女も多ある中にいかなる美目容うるはしき
を一度抱寝したる人ハたとへ命を取るとも更に厭ハずと言ハあらず
とて左右の手を紙ちかと握の中ぞ法師も又大にあきれて我等ハ抱寝
をする所どもおよびがたき事にハあらねバせめてその手に玉の手をとれ大ざ
すりとも外纸のまでるぞとて松枝の傍の耳ざりる黒く紫ざするとも汁
の出る手足纸をこのおろりくさし入れて湯の中に銭をかけ檐いの中から出
妻子どもてハ二人へてそのまゝ咽のと纸数中をもだきるわに友人らんに

ちさがひたまへ匠とりのよそ小仙人ま四人ま二人ハあるべ
よろかるほどくゝ他よりはえて砂ヒかゝぐるれば見ふも角ふしたがうて
後のぐれぞやとり秘笑つゝ母ハ先ゆゝ多へ匠妻ぶりと愛ふ添せ
る事ゆゝとり人ハまゝる者の病を看病せんとて付添ゆゝつまどもま
ハまや病金て家ゆ帰ぬ安ハもとゝるづきの有ふ任ゝ今ゝ人ゝ一生まり
はゝまりけ後のつまゝいゝ今ゝ日紙送りつゝがゝ遠の遠かゝぐる
ゝゝ匠ざの種匠ゝ地ゝ一ゝ来ゝ妻も可ゝ妻ゝ匠ゝ見ゝ見
ゆも角ふもけんゝ地ゝ匠ゝ見ゝ変ゝ汚げゝ紙猿ゝ来ゝせ
ゝバ業師如来のゝ神の神もあんゝ見ゝ今ゝ匠ゝ人ゝ連絡
たまひて人の作ゝ楽ゝ紙ゝ匠ゝ妻ふも楽ゝとさせゝはひゝたゝはゝ
かりひのんどものどゝとはゝゝさせゝへゝと実ゝ母ふゝゝふゝ二人のゝ

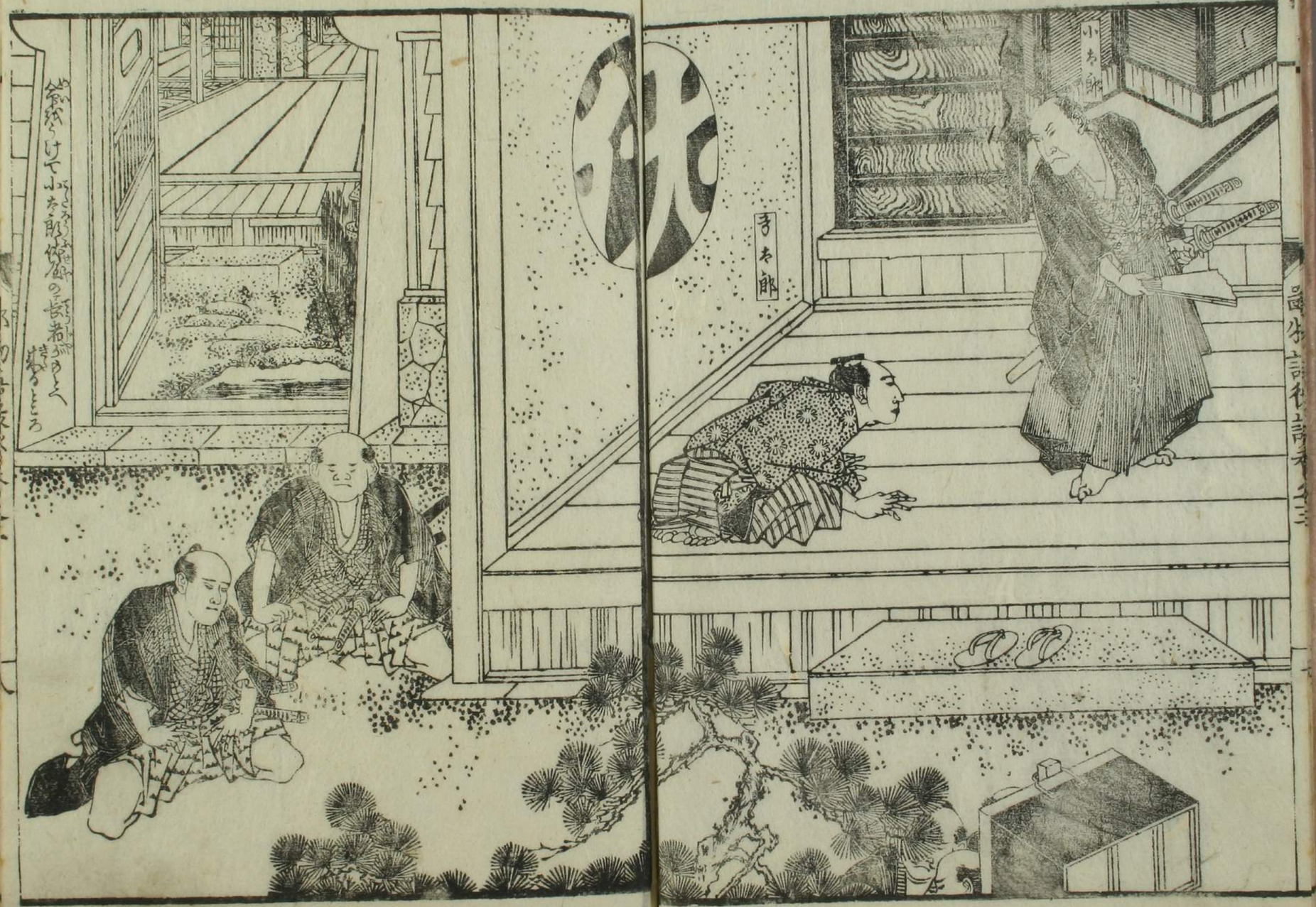
どり実やゝて孔押ぬぐひゝ母ゝ汚ゝ衣のまゝまゝあんを仕ひつゝ
ゝ所の業間ハ知りゝゝ小仙人より先ゝ来ゝ拝むゝのゝ見ゝ所ゝ入り
ゝゝゝ人のみゝゝゝ来ぬ所ゝ見ゝ紙ゝかゝる多ぎ
ゆゝ二人の聖人ゝ業間もわゝぬまゝけてこゝ紙遠ゝ来の根ゝ角
小ゝ毎ゝはゝあちゝこちゝと走ゝひゆゝふゝ一つの細き岩川のゝゝへ
出ゝゝ二年後ゝ九本の樹をわゝゝつゝ小仙ゝゝを追ゆゝて三四
丁ぐかりとわゝき比小仙ハゝゝの流る木の根の雨まゝゝ落ゝる
りゝふゝ大ゝまゝ紙流せゝ洞穴の動き所ゝ紙ゝのびゝてゝと生ゝ
つゝ九本樹のまゝゝゝ紙一本つゝ一ゝ一ゝゝを見ゝふ湯ゝ
ゝ家ゝゝ帰りゝゝゝゝゝ紙宿の素ふ語ゝ思ひて夜ゝ明ゝ業人
四五人を頼ゝ仙屋ゝゝ遣ゝゝゝ戻りぬ後ゝふゝ病人ゝ見ゝゝ

いるる者ぞと尋ぬるに伝屋のもげ次六郎〻〻頼を絞の奥にてゐるどう
小仙ぐ湯場に来り紙刷りてわざと病人の共似にて代湯げるに待るけ日
比のおのひをそ〻〻とて食の持まに物をどあ〻〻をれを己れがさ
うど〻をうに小仙代弥まんとての悪ざ〻と浅まで出れと知〻れらう
実に悪〻とても悪むべきの甚〻れと云つぶ〻恩に書るるまんの妻を横
恋慕をいるのるに〻〻びか〻に伝紙屋の移るひををせ〻身の果天狗ゐ
をの和まり通るぶ紙枕入て〻に喜をが妻を移るる空和へいるもて
山男に驚れぶ母と思案てあ〻しつをを悪病のあふる母をされて身を
いんとも出る年ぶ〻年ぶの湯をけて治もるるに苦痛も出〻安るう
れども家を後ろ〻紙に元のぶ〻牧夜の嵐秋毎〻に来りて夜毎を
うぶへ若〻もる年いをんるるぶ〻なるるれ嵐四五疋来りて頬のけるるよ

り額のあるり紙を〻かを懐と〻て貝紙覆〻つるに二疋の嵐右と先より
肩をるよ伝ちりて胴のと紙むぎと懐〻ひるれがあと麦たて絶冷り
かるもる年たびは〻て後は面へられあぶり新に嵐のかるもちを疼と
るて幾和をるれるやはるれば甚をに見るもるるるるひ家る
とて色もるびたぶるかとと紙細〻て悪年の企ての〻ぶ〻る

長者原の忘筆

それい猪〻美〻こるに小又新浦田和弄敬よに信法る海壮のあ郎
持鼻〻武勇の必え丈小るる〻経会の器も他の人〻よるえる年
を賞美有〻先遣〻婚姻の覚中入あて百り縣の小寸能り祝言
の儀式元はる〻〻ぶれのよ〻て中御らまるるが諸道を〻紙始る〻〻
諸年の用四寸でも海壮家の不紙中月一統へけ合りる小先〇三京


小右郎
孝右郎
銀杏けて小右郎伯父の長者ぶりとく
なるとろ

其後菅原に御猟ありける折ふし猟場の御用相勤める佐野屋の長者園右
衛門は農民なれども豪富にてそのころ武家へは縁あるもの多かりければ万端の
用事はかれに申付べきのよし某家よりも奥に相談ありけるによりえらび
縣の小三郎をも同じく佐野屋の長者がもとへ婿縁の縁組まかるべきの御用向
被仰付たる小三郎はその従者として某家の家来某氏召具し小三郎の身のまはり
美々しく装ひて長者がもとへ入来り縁組の事ども主人の願ひを述て万端
まかなひの義はなるべきほどに首尾よく整ひければ中入られば長者も小三郎へ
大ひに悦び家の面目身の冥加人も羨しく中にも武の道縁御用役付しとく
の誉光ありける事なりとて座敷を一ト間しつらへて小三郎を丁寧に殺
まひの上は猟場の御用ありて縁組の儀の道中諸式まで萬の勢
猟甲斐信濃上州下野の所々婚礼の調度御中付たる中にも巳

を受事なるは只よき續一面のみなり是は此ころの習ひにて貴人高位の御あたりく
は中にもおよばず下賤の者の娘なりとも婚姻の節には年經たる名鏡をば
其家の系図のごとくにて祝言第一の宝として其家へ嫁するありさまなれども
貴人高家の祝言の式には古鏡を櫃に納めて持しものなり事あれども此箱
斎殿の家にはいかなる事にや古鏡の事もなくて此事を深く思ひ
わづらひ居し小三郎に命ぜられて此事を佐野屋の長者と共に相談に
およびしが家は農家なれど巨富ぬきんでれば珍宝もあまたあれどもこれぞ
よき事に請て相談に及びて探し入れば家にあるべくもそれとなくの品とて
たびたびの鏡は多く得る事もありぬべしと仰ありけるに何れの道に侍
ひとも此事調へんぞとよろこび付けて長者がもとへ仕合ふてそれ
よびける中に長者子三郎が妻の小仙といふ者と越後の國奥の宗

育てる者を今日こゝに入れし縁のちなみ娘すりたるぞ中に最も出るべく
ぶべくおもふ所きとなるまかぶ文よわうんぬれば今年二十余年の昔者
と往こゝにちなみ武士とありまこゝに仙ぶし家の妻とあるべき中に美ふぐ
ふ事なる中もあるべきもあるべき武士鏡の中より付て松寿院を始めとせ
ふちなみ能ふもんを解きある中弧氣の毒なおもいうもて来るべき古鏡
一面を得て来まるせ京と嘱者ん解きるがあるべき長者きんと
んなるあるべきはこゝ行秋妻の小仙文すべ今敷を付て家を連れ出
ひるべき紙袋をもひて鏡こそかぶ母の紙母の壱より持つべくるべ
ものまて女の守りあればこそ持べる紙文のちんを志ふ紙屋の裏るべ
れの山家を索むれども得ずてかるべたもひしぶいづこの石ようひめ亜なま
ひいんとこゝら身体索めこゝんをもや先備糸しべ小仙を志べ

のお絵ひしんがそれこそ幸ひのこゝるべたく母を伝べる霊べり共ぶ
深くひめ亜のこゝふてハ志ふ宝紙も堀むるふ同じ紙中べる人のこゝふも重寶
こゝるべまこゝ母の寶の伝れ用を力ぬるこゝを善ても徒をも世を布絶を
のつとめハたつべりんれば見るん用遣たこゝ中こゝあべるべ糸こゝ
こゝて撥素めるふ帝穂の庶まこゝ二重の箱の中へ紙べ志こゝあるこゝ
出して見紙小志郎まで見せこゝるふ志郎ハ見をこゝあげて絞こ
うち返しべつ打縁め表をこゝめつ裏を返して中紙べ見中こゝ
箱の上まこゝて又袋をこゝべて見表を見べきこゝと伝庵のこゝ紙
めて中こゝハ紙こゝんべべが母ふこゝこゝて見ハ見ある一面こゝるこゝさ小ハハ荷
こゝる中緒いこゝ縁関縁のあるこゝて志長者べこゝまハ伝べこゝいこゝいこゝ
げふぞ中こゝんべべこゝ長者こゝ者こゝ母こゝハさんべまこゝげる

し續き付いて八殊の外なる長しとて物語の中まで付る我父主世の御り
ふと用心あり て学士淀臺山のわたりと夕間暮ふ通り給る 父公暫く
寂莫村の住院今もあれぬと雖る道をすげ笠かとふ結るうへさその里
を離れる並木を四町ぶ程ゆくふ松のあぶるとあるを捷くのうげふ
えてをふあ供のさくりなげつ注森の志る紙衣ふ脱ていう衣りのまやと
立ちりて 殿うかゞひ行るまうちわうけるる 牛打どりの志ぶとげるる 奴
原と四人集まりまうまの辛のうろ志ふ志りまゝく辛のうろ志ふ歳ぞかりるる 婦と
中まとひかゝよかりよと罵りあひてその負代のかゝふ山女を廿五ふ
もあぶるう志どひ志ろ〳〵紙ぱるるねあるまいう 教人の娘をう勾きて
かゝる喜怒の振舞をやなせるゝ助け叔〳〵ぶやとおひ懐よたくまと人
芙金此て女紙買面家ふ法を為りてらづとら後かゝの者ふ〳〵父ぶ名

仰とゞ女をい教人とのふぞやと尋ふれるも只泣ふ泣伏りて打ぐふ元
いそひバ志ろ志ぶあて八問尋るふ機姫よれ牛ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ妻
八城浪する真の那村の山とふる所の者よて名をバ小仙とひて父もひり
女もあり母の名ハ山ざ紀〳〵父をバ祐鬼どのとて里の人〳〵等の呼れ
とうなさあ〳〵バひとを〳〵ふ毎〳〵者のるまてハあしとて村ひまと其比
第ふる彼の種枝ハ妻の姫ふ〳〵ふむ〳〵弱るど紙ハ賀潔〳〵たる絡ふ家上紅
の纐纈漆の帯志うわのぼ〳〵とひとりの世かとれるハ人並〳〵ハ育
ゞふもあ〳〵ぶ巳いうるまて秘里を尋祐素ぬ〳〵早う京〳〵きし後
とて父ふる人のこづ〳〵ふのを尋紀祐〳〵も女ゞ穢ようけうる境
を志巳とて素むれども更ハさざかまそれとうの所をそぐれゞ
〳〵家ふ人のて先〳〵ふ畏ひ京仰をりて物語りをど伏〳〵紀〳〵

のてびの事ども有りてわれ生きをぎ中うも有ぢ〜こかりをあつも早
二十余年の月日紙ふうんり去ふ小甚女のんぐうえ中ビして殺消
安まをぐれる生ばとそ文も我国の伽小伊ビつ賜なな志ぬかふ〜ひ〜て
只今うまへ僕と夫婦の契をば仕ふうり則氏猿ハそのと紀の守りは
て妻の小紙が守りあつ凡んどもを貴の中家ま去ふぐきて物の毎り
つる半紙ふぐ〜ひひ巾ふ紙妻もも〜小痛い〜くあひ弟〜せ郭角
是ビて苦〜ふるほ〜ふ弟〜世ひ巾と拭ふうれ小宇郎ハ浅ビ深め
て猪〜ぐ程ハ拭ふもえいそでけうふるが中有ふ〜是ビ中ふるへそも山ビ猿
ハ昔伴猿の国ま夫婦の猿拭師あつて夫を雄ビ妻を雌麻と
いふ朝ま毎ま登りて月紙ふうり家溪ま今〜ふ小舟の汚をそ〜ぐ
夫婦清淳すて寅の一年ま紀也洞山の土紙ふき分ても〜三十六面

の猿をうちかじけ〜も半人へなるま甚うち三面ハ藤我の金藤と
いへ四方へさ〜ぐるそづを一面紙萱生の山の麓ふる松の樹のもとふ埋
めてしけるぬまよりて捕へ〜死猿ま紙ふ巾きは巾ふ〜かふれだ二
人の夫婦伴猿の国を通〜武義猿の去ふる小川の里といふ家毋
を宿〜夫ハ妻へ〜びあ国の家小生宅ふれども人の後言ま依て流
浪〜夫婦ハ命は〜別生〜ふ〜ビ〜ふ〜ども思びて田舎の猿ふ老と
ふう古ふ伴猿の国まいふうて埋ふる猿をふ入ふれば不思儀ま義
金ビて元の婦と契て結び雄ふ夫ハ九十二歳を猿て世ふ去婦ふ
九十四歳すて死〜ふ〜ふ〜かふる者の作ふるぜふ猿ふれば甚嗚徳
赫〜ビて是紙保の者ハ毋ま元ふ運を拭き是紙失ふ者ハ寿命は二
次第小裏へふとビ行へその後ふ作の何ぐふ我先祖ふれども死産

小右郎
竹井寫
小仙
手右郎

紙漉よさすらひ代くれのしのよ浅瀬を遣て紙よいろうて世十二代を種
こうさんれば代遣ハのと伴藤の出るれ山より出て法ふりて松山の鏡
とこのとハ雄雌の遣ゑるゞ級ふ〻ゝ
袋すゝかる鶯のきれハ鶯の金銀ふく亀土倉の玄宗白帝七龍
あいの鶯ゝる物笑妃のゝびきねのきれて紙鶯ゝ豊紙が國寺の青海切
いるゆ有ゝ去るゝ紙ハ舟の妻と宮あぬる所の女山仙ゝ人紙娘よ
ゝ有あゝびゝ有ゝ疑ゝくなひゝ九の極の下ふ一つの赤ゝ恵疫
あり紙も同じ九ゝ星のくゝり指ふ指中指ゝ長ゝ
とゝきれくゝ郎ふ不ゝ三ゝ小ゝ郎市ゝ中ゝ
ふゝの疑ゝくなひゝ去ゝとゝ紙ゝ惜ゝ
ゝる運の身を包ゝ幾ゝ鶯の切を紙ゝ会ゝ鏡の袋ゝ会ふ

ゝ谷とゝひ掃ゝとゝひゝを遣ゝ和ふ不思儀ゝ今日斗ゝも
男ゝ遠ゝ去ゝ牛の奇遇をゝ
ゝ郎ゝ文ふ郎ゝ遠ゝ
ゝふ異ゝ会ゝ実の母ふも思ゝ
ゝ世ゝ遠程ゝ牛ゝ

本紙原の故牛

去ゝ小ゝ屋の長者夫婦の者ゝ
男ふ親ゝの長者紙ゝ生ゝ
牛ゝ猟ゝ代嗅遣の徒ゝ
ゝ去を睡ゝ
婦ゝ親の出世紙ゝ

且ハ不思儀の値偶を申上まいらせ候へバ梅寿殿にも大きに御満足有
て数多の御褒美を給りしうへ小女郎事ハ御加増有て家老並の者となし
親にも仰られ長者にも小仙にも共々に御目通りゆるされけるこそめでたけれ
是よりして ひとつの大望とハ長者が父の仇をむくひ父が修羅の苦患
をたすけまいらせまゐらするより外ハ他事なくすごしけり継男小ちよ郎に家
ゆづれいとも安き事と取りたてく敵の奴翅有て天をかけり郷有て
地をくゞるとも一網に討んときびしき御免をかうむりてぞ出たち
がし兼て往業を集めて近くにあるにも悪事をうけとりてぞ幸
なるの主用とて大切なり我の家業ハ先し次第にして早く梅寿
殿の婚姻の用意なりての事成就にて志を合せて其後討ちに細の
あるべきとかくし給ひ其事のことぞいとめでたかりけるとて

世を去りし後も猶ぞ残りし郷の身の果を世間にハさらし
ま裨識ましくあるところにひありし日本への田園の修行者ありて行脚
立ぬる人遠きも近きもたちよりて牛の小屋物置部屋の軒下にも
りも一夜あかさせたびてよとの事に安き事なりと社
なすにいと安くと休息させて接待など丁寧に調へて迎へしが
其ころ修行者ハ今逢ひ変はりしと求めたれどもいかなる事か折ふしねども逢つ
うハ遠慮して一両手過しよとて掛逢ひしのよしやきゝいに成事ぞと
問ひるとも廻国の修行者申けるハ今宵ひそかに御物語りて中夜までの
よしと申べ余の事にもひりいどゝ身ハ伊勢の国なる間もの
市場村といふ所の者にて随分親の事有て諸国の仏閣を巡拝し
参らせきのふ当国浅間山に登りけふハ滝より をハ静をこし

のぞきゐ洞のわらうふ語く紙紙ゆめてあの物ふ〜遠る長間ま梳
英の氣ふつくとの元主あぐ物る中小癒喜えるる蛙の腰と首とが
ふるんはちぐ〜蛙虫の中形る毒〜ちや助けまと
はる毒毒をつきぬく中ふ兵ふんが岩を結ひてかつ〜の根はすがり
つきゐつと是紙のぞれるふ七結八結の苦〜ほてりぐえるる〜糸
の中うる〜紙さ〜処〜何母〜ものをとれ〜ふにてる紙物ふ
る扱扶をさ〜処〜ふる扶の先ま掛る〜是紙見ひまち
いるる笑強ふんが何母〜書〜と見るる南無善光寺仏拝と
てふ伝濃国恒科新蔵祭伏屋の長着る太郎毎月行年六十九
歳とあイ則いふまていりとて資布る物行年の中う新〜く
反生て長者が兼へ変んで母〜ふて是を見るまぐ〜るの

を紙の穂筆をうつて細ぐ〜と書るふ人のちうれるりのふも見え
ぐ〜ふ〜ふきぐみれるふ文字のふら〜筆〜て布まもうれるゆうふぐ
見えまるるうち郎へ月るるより流をち〜と流〜たあ〜ばいよ〜
毎月月へ現世の業苦も牧をなまふ医て代毒ふ〜眼前を流るが嶽
の地獄の釜ふ苦〜ふ〜ふんなまへ〜ふ医〜ふ医奇怪の終うとらへも
らひつ〜ふる火挿車うて行りふるかるとそぐめて人のぐ〜ふ〜おりい金
て紙げきかなこ〜ふるこを道理るる扶ま〜ふ紙紙着が中ふる我苦ま〜ふ
り〜書須ふうけ〜ふをまるひ〜ふ〜まる人ふむうひて直財
ふ是〜紙紙屋のりふ〜ふ〜ぶけ系〜ふ〜紙ふけがひ
ひりふ和文ふもや仏ふ〜ふの代ふ母ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
我屋ふまかる〜ぶなや〜和家ふ胸あふ和の牛ふ入ふ〜ふ毛ぶ

牛とまりて富貴を遂よ漆屋の孫よ三年の辛苦を積て後
世に名をまゝ人界ふ紙うけて世人とまれたものと紙二つの仏閣ふ
樣を縛く五世の勅紙よわうて金く善男の子まう丸生紙う
ふるうり山奴いうふ山ふ紙屋の長者ふ殺人留年とりへ強紙紙
遂ふ山て善根を報ず紙奴こて慈悲情の逆紙いく善光寺れ
常姫を寄附せるの〳〵紙者恨をなをめとうけるむくひ富ふ
ゆりて因果孫ふの赤ゆ未まだもつく當時ふ貧ふる者いろ
紙善根をつくしく慈悲情の紙をいくもとりへうも孫長ふ牛心
れろう紙こはて母さふひとふの代なりうりても殘りるく五穀て
毒量を劫をふるとりへうも牧苦惱をうく尼ーこの逆福と
逆ふ我ふ人もかの紙消し罪を滅せんよ善光寺のいろ

かの寄附せんを企る常姫のうれう紙ぞ紙つぶて方姫を
三万人の紙ふをつくして紙鬼よ紙しも分紙助けみが地獄陽免責を
の三悪の苦〳〵紙のぐれ〳〵紙遠の紙ようあぐ天上の果ふも
うくぶきあうとひ紙りてりあのふの中ふある苦〳〵やと云
づく失ひうりとかくるゆで子ふも小仏の如く冷ふうり
西の世ふる河を世てうもおそろげふわる紙つ法うふのつく
もあ〳〵ぐりうかくて行間ふこのう紙ふて善花を咲ゆて紙紙
貴紙れ得て種文ふ色と紙鋼ふ紙の紙ふ紙紙ふ紙を世紙ず得
紙のくふとうくその紙いあけ肉色ぶ牛紙屋ふ紙でかの笑法を紙て
牛の頭ふいくかうふひ書ま紙ぞぐる牛ふ牛ふ泥舞花ふして文ふ
紙のふ綱ふ紙くありるが第七寅月の小屋うる牝牛ふ紙笑法を頭

俊行者

晶牛吉行

のこくまいてぶかまるとひとしく猫をおりて頭をうつ尾を吸りこて
目をうつ流をつ流しつつ船をおもふ付おもてる世をふうえいるる
不思議なるものあまりひろうれそれう長着この紙紙新を猫く
宮を物をとめてそれと陸に牛紙とるみひ角が炎強をうけく若
くうう幸くまうでらせいるこうを稲く老上はの仏くに仏を
無の墨が月が牛ふひうれうく善光寺絵うとうれいる黒へもういる
志うれで善業の所感へその周遠といへも紙は現書の笑と滅
無報の報周いその果をるう船うとへも世でるく孫くの不幸が
いくれりと従せたまひて人いそのれのまとうまけの石の猫をいる
いうの幸う芽紙世いうの社ろ実とありてりとの草木とせ出ね
とへあくざるうりしつまるとの猫のこばまくてこと未来いつち

わどまでも因果報恩の紙ぎーいつぬうだりへ芋しつくせばいつしむべく
おそるべきことへ山善悪の邪正の一会ふーてまると見性成仏の一機うり
曽平紙父が要報の種紙苔くーようその猫をこばまつくいうて
仏紙十紙色家を来へまでば邪想うて消滅もうくむきを九
まの眼力四へ見花ることたはざれども神明仏懐の真眼へいくく
小見抜なへかれるうり邪へうおれるうおそうあるへみが色
想ることまりへ要ものくへうくでくて幸ぬるふまりていこ世て
むくひて通うれ時節すく善へをこうとへもはるくふわるびて
へ孫業花の陽相とるれば返ちくもへ遠うてけくむきへ善招の種
うう人傷とていこうくいるへ紙へ傷好邪模のはうくれうでいりる

月賀節物語後談巻第三終